常野の騒乱　（靖国神社忠魂史より）

さて長藩の挙兵に呼応して義旗を筑波に翻した水戸志士の行動は如何に終始したか。

曩（さき）に長州の桂小五郎・佐久間克三郎・因州の八木良藏・沖剛介・千葉重太郎等と、東西併挙のことを謀って帰国した藤田小四郎は、先ず郷校小川館（新治郡小川に在り）の同志を誘い、共に水戸町奉行田丸稲之衛門を説いて首将と仰ぎ、元治元年三月二十六日、兵を常陸筑波山に挙げたのであった。

藤田小四郎は東湖の第四子で常時年齢（年齢）漸（ようやく）二十二歳、夙に尊攘の志を抱き頻（しき）りに京江の間を往来して諸国の志士と図るところあったが、ここに於いて書を老中板倉勝静へ呈（しめ）して幕府の姑息を難じ、更に「松平慶永・松平容保・伊達宗城・島津久光等が宮堂上を邪謀に引き入れて上下を壅閉「ようへい」（ふさぎとじること）し、天朝を欺罔「ぎもう」（相手を錯誤に陥らせるように事実をいつわること）し奉り（たてまつり）、未だ外夷「がいい」（外国人をいやしめていう語）を掃攘する能はざるが如きは慨歎「がいたん」（うれいなげくこと）に堪えざる次第である。願くは速やかに邪謀誤国（よこしまのはかりごとでくにをあやまち）の罪を正し、断然攘夷の令を布き、天下の耳目を一新せられんことを請う」と挙兵の所似を説き、次いで因州（鳥取藩）の池田慶徳に書を贈り「目下天下の大勢を按アンずるに、去年八月（文久三年八月十八日政変を指す）薩賊會奸の徒、長門宰相（さいしょう）首相を陥れ、七卿を逐ひ、廟堂の正義を拒絶さるは滔天の罪悪なるに、猶ほ輦殼の下を横行し廟堂の大政に参与させるが如き、或いは去年以来攘夷の勅命数々下ろされる、未だ横浜一港の閉鎖さへ行ふ能はざるが如き、孰れも（いずれも）解す可（べ）からざるの甚だしきものである。ここに於いて攘夷の先鋒となり、攘夷の陣営に討ち入って忠義の鬼となる積もりなれば、願わくは攘夷先鋒の勅命を賜るよう」とその斡旋を請うたのであった。

かくて筑波に據つた水藩志士は、更に日光の嶮（けん）を利用しようとして四月三日山を下り、同十日、日光に赴き、東照宮を拝して攘夷の軍議を凝らした。ここに於いて幕府も大いに驚き、宇都宮以下常野の十二藩に令して警戒を厳にしたので、田丸は一同を率いて十七日下野大平山に移り、本坊蓮祥院を本陣とし、近郷に兵を募り物資の徴収に努めた。かくて総勢千余人を得、軍備全く整ったので、五月晦日同所を発して再び筑波山に屯集した。

特に水戸藩にあっては、尊攘派の武田伊賀守正生（耕雲斎）・岡田信濃守徳至等が執政として実権を握っていたので、失意の境遇にあって久しく時機を窺がっていた佐幕派の市川三左衛門・朝比奈彌太郎・佐藤圖書等は時こそ到ると、その徒数百人を率いて水戸より江戸に上り、藩主慶篤に謁して速やかに筑波の黨徒を追討し、且これと気脈を通じる有司の更迭を迫った。會々藩廳に於いては幕命によって武田の職を免じ隠居慎に処した折であったので、慶篤も市川等の意見を居れて更に岡田を羅免させ新たに朝比奈・市川・佐藤を執政とした。

一方、幕府は六月九日を以って、川越以下武蔵・常陸・下総の諸大名十一藩に追討を命じ、十日更に関八州の諸藩をしてこれを援けしめると共に、十七日には歩騎砲の三兵を出して筑波攻撃に当たらしめることとしたが、この日市川三左衛門も亦兵を率いて江戸を発した。

かくて幕府の追討軍と市川勢とは七月六日下妻に達し、翌朝高道組に筑波勢を撃破したが、一度び退いた筑波勢は間もなく逆襲に転じ、追討軍を下妻に敗ってこれを結城・小山方面に潰走せしめた。

時恰（ときあたかも）長州の大兵が洛外に屯集して京都を包囲する最中であった。

ここに於いて幕府は常総野の諸藩に重ねて出兵を命じ、更に兵力を増加してこれを圧倒しようと計った。

翻って突如の執政更迭は、水戸にある尊攘派をして極度に憤慨せしめた。のち榊原新左衛門は大久保甚五左衛門・鳥居瀬兵衛と共に出府し、戸田銀次郎・藤田健次郎と共にその不可を論じ、特に榊原斉昭の遺訓を懐にして慶篤に迫ったので、慶篤も已むなく佐藤・朝比奈を免じて岡部忠藏・鈴木縫殿を執政に挙げた。この時追討軍にあったため突然罷めらるべくして罷められなかった市川三左衛門は、下妻敗戦後再挙を画して帰府の途中、七月十五日武州杉戸驛に於いて帰国する朝比奈・佐藤に会って、初めて江戸幕府が再び尊攘派の手に落ちたことを知ったのであった。のち三名は会い携えて本国に帰り、水戸城に據ったのである。

これを知った慶篤は直ちに幕府に申請して、支封宍戸藩主松平大炊頭頼徳を目代とし、水戸表鎮撫のことに当たらせた。頼徳は榊原・大久保・鳥居以下数百人を率いて八月四日江戸を発して鎮撫の途に上がったが、かねてより筑波勢に同情を寄せていた彼の目的は、市川等を制して水戸城をその手から回収するにあった。されば同月七日頼徳の一行が水戸を距（へだたる）数里の片倉に到

るや、田丸・藤田等の筑波勢がこれに合し、次いで城下間近の吉田に達すれば武田等が同志を率いてこれに参加した。

かくて八月十日、頼徳は大勢を率いて水戸城に入ろうとしたが、これを知った城内の佐幕達は、吉田付近に邀撃して勢い猖獗「しょうけつ」（わるいものの勢いが盛んなこと）を極めたので、頼徳等はやむなく道を転じて、城東那珂湊の　賓館（いんひんかん）に赴き、同地の敵を撃退した。

その後再び城下に迫って細谷村の神勢館に入り、使いを派して再三市川等を諭したが、聴きいれられぬため、又湊村に退いて市川勢と対戦することとなった。時に武田正生等は別れて付近の館山に據り、田丸・藤田等の筑波勢も湊勢に合体して平磯に本営を置き、協力してその共同の敵に向かったのである。

ここに筑波勢の挙兵と筑波勢の追討とは全くその意義を失い、純然たる水戸の内訌「ないこう」（内部の乱れ、うちわもめ）戦と化したのである。

かかる折しも幕軍の総帥たる田沼意尊は八月二十五日笠間に至り、諸藩の兵を部署して那珂湊を包囲し、九月初旬以来攻撃を開始すれば、幕艦も亦海上から砲撃を加え、別軍は平磯に筑波勢を攻撃した。

かくて筑波勢は戦利あらず、九月二十五日に至って那珂湊に移り湊勢に合したが、大勢には遂に抗し難く、事の次第を藩主慶篤に報ずるため少数の兵を率いて脱した頼徳は、翌二十六日西郷地村に於いて捕はれた。頼徳は敵方の奸計「かんけい」（わるだくみ）に陥って城下の南部に押し籠められ、十月五日に至って自刃せしめられた。この時頼徳に随従した者のうち敵と戦って死する者二人、同十六日に至って斬られる者二十六人、獄中病を獲て死亡する者二十人に及んだ。

一方、頼徳に随行していた水藩榊原新左衛門等は、筑波勢と協力して孤軍を守り防戦大に努めたが、遂に十月二十三日陥落するに及び、湊勢は幕軍に降服、筑波勢は館山に走って武田正生等の軍に投じた。而（しか）して幕軍に投降した榊原等三百余人は佐倉藩預けとなり、後古河藩に移されて翌慶応元年春処刑された。

館山勢に合した筑波勢は武田正生を首将と仰ぎ、常時京都に在った一橋慶喜に救解を求めようとして、重圍「じゅうい」（幾重にも取り巻いてかこまれる）を脱して上国に走った。

顧れば筑波挙兵以来七月を閲「えつ」（経過すること）し、常総野三国に亘っての大騒乱であっ

た。而も（しかも）中塗血を以って血を洗う内訌戦と化して以来は全く混乱の状態に陥り、或いは戦場に斃（たおれ）、或いは捕斬せられる者数限りなく、これに連座して非命に死する者も亦数十人の多きに達した。更に累のか弱き妻子眷族「けんぞく」（一族、親族、身内）にまで及んだことは悲惨の極みである。今暫く刑死・獄中病死等を事件解決後に廻して、筑波挙兵より武田正生等の脱出までの期間に於ける戦死者を列記すれば次の通りであった。

かくて武田正生の率いる館山・筑波の連合軍は行く行く沿道の諸藩と戦いつつ、中仙道を辿り美濃に出て、越前新保驛に達したのは十二月十一日であった。

この上京途中に於いて左記十名の戦死者を出すに至った。

この時、一橋慶喜は一行の西上を知って自ら水戸・会津・桑名・加州・筑前・小田原等諸藩の兵を督して江州大津に出陣していたので、頼る木陰に雨漏る思いの武田等は加州藩を通じて慶喜に陳情書を上り、市川等と戦うのがやむを得なかった所以を辯（弁）じ尊攘の素志を達せしめられんことを哀訴したが、慶喜はこれを許すかわりに、更に陣を進めて海津に到り、今にも進撃を開始しようとしたので、武田勢はここに全く進退窮まり遂に十七日加州藩の軍門に降った。

のち慶喜は加州藩に命じてこれを敦賀に禁錮せしめ、次いで幕吏「ばくり」（幕府の役人）に引渡したが、幕府は翌慶応元年二月四日より二十三日にかけ、武田・田丸・藤田・山國以下三百五十二人を斬り、與黨四百六十一人を流罪又は、追放に処した。

ここに流石の騒乱も全く平定するに至ったが、事変勃発以来この悲惨解決を見るに至るまでに、或いは刑死に会い、或いは獄中病を得て死没した者等を類別列記すれば、実に左の多数に上り、かくて水戸尊攘派はここに潰えるに至った。

又この騒乱中、市川等が如何に尊攘派の人々を憎み、その気勢を殺がんしたかは、武田・山國・田丸・田原等領袖と見られる人々の妻子系累を捕斬したことによっても知られる。即ち武田家に於いてはその老母より常時二歳の幼児までも捕らえてこれを獄に投じ、後ち遂に斬殺して梟首「きょうしゅ」（斬罪に処せられた人の首を木にかけてさらすこと。さらし首）したのであった。その他の人々も、苛酷な獄中の責苦に病を獲て斃（たお）れたが、石原は無念の余りに遂に自殺したものであった。今左に列記するこれ等の殉難者を一瞥する時、常時の惨状を想起して誰か涙せぬものがあろう。